

展覧会について

ブラックホールの写真を見ながらさまざまな考えが浮かんでくる。その一つは、気になっていたブラックホールの存在を示すリングの部分（というか時空が歪んでいく部分）が明瞭に写し出されていたことである。

それはともかく、この画像を、画家のロベルト・マッタが知ったならば、どのような思いにとらわれたであろうか。彼は自らの作品について説明するときにはいつもアインシュタインの考えを持ち出し、時空のこと、時間のこと、空間のこと、その中にある存在のこと、それらことを意識し始めると「目眩」がする、と言いつつ、その「目眩」が作品を生みだし、成立するのだ、と語っている。この「目眩」は、ダリの言う「幻影」とほぼ同じ意味・内容だが、このブラックホールさらには数値的には存在可能なワームホール、そしてそこから考えられる時空間のワープやタイムトラベル、さらにはそれが可能であるとして、ブラックホールの内側から見た世界はどのようなものであるのか、と次から次へと「目眩」が、「幻影」が引き起こされてくる。

なぜこのようなことを話しているかという、今回の「呼応するインテリア」というタイトルについて考えていたときに、いろいろな妄想が沸き上がって来たからである。とともに、森本太郎の表現に見られる収斂する描かれたものの強さは、まるでブラックホールのような強力な磁場が存在するかのように私たちをひきつけてやまないのだ。それらはただ描かれたものの外観だけでなく、それが持つ内的（インテリア）な在りようが写し出される。もちろんそれは作家の意識の在りようでもあるのは言うまでもない。ただそこにある事物、それらひとつひとつがそれぞれに意味を持つ。作家は瞬時にそれに感応しながら、思考し描いていく。彼の作品が見る者を魅了するのはその点にあるからではないだろうか。

岡村 多佳夫（おかむら・たかお）／美術評論家